

概要

美術がつなぐ、子ども・地域・学校  
学校現場が模索した教科融合型学習の試み

本研究は、2017年度より、津久見市教育委員会、大分大学、大分県立美術館、津久見市立第一中学校が協力し、地域の教育資源を活用しながら、アート(美術科)と言葉(国語科、英語科)を軸に「色」を共通項とした美術科・国語科・理科・英語科・総合的な学習の時間との教科融合型学習を開発・展開してきたものである。本稿では、そうした教科融合型学習の取り組みが現場の教職員に成長をもたらし、さらには学校経営改革まで至ったプロセスを追いながら、教科融合によって発展していった取り組みの具体的な内容について報告する。

当初、2021年実施である新学習指導要領(平成29年度告示)の教育理念について「開かれた教育課程」はもとより、教科横断的な学習に対し、現場の理解は薄かった。教職員間の連携も足りず、不登校生徒などへの指導が遅れがちな実態もあった。そこで、「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習の取り組みも含め、教師一人一人の役割を明確化し、授業改善の「場」の設定に努めた。その中で開発した授業は、教科間や社会とのつながりを生み出す授業となり、「ふるさと再発見」や学校全体で「未来の大人」を育成するものへと変容していった。

生徒たちは津久見の自然の「色」に触れ、新たな色名を考え出したり、市内無人島(網代島)の岩石の成分を分析したり、地域の魅力を発信する文章を日本語や英語で考えることに取り組んだ。こうした学びは、美術科の感じる心と創造力、国語科・英語科の思いや考えを言語化する力を融合的に結びつける。「教科融合」の概念は教科の枠組みを超え、生徒たちに多様な学びをもたらすきっかけを与える。

本実践研究における特筆すべき成果は次の3点である。

1. 子どもの変化(協働的な学びによる生徒間の絆の深まり)
2. 教師の変化(教科・学年を越えて手を取り合う姿)
3. 地域の変化(地域の企業との関わり)

今後の課題は、これまでの取り組みを持続可能な取り組みへと改善していくことである。



ながまつ よしえ  
《執筆代表者》永松 芳恵

勤務先: 大分県臼杵市立立志生小学校 教頭  
前任校: 大分県津久見市立第一中学校 教頭  
出身校: 大分県立芸術短期大学美術専攻科  
大分大学大学院教育学研究科



《共同研究者》

ふじい やすこ  
藤井 康子

大分大学 准教授(美術教育分野)(写真左)

はなさか あゆむ  
花坂 歩

大分大学 准教授(国語教育分野)(写真右)

※本実践は、筆者の前任教・津久見市立第一中学校での実践です。

## 1. はじめに

近年、社会は急激に変化している。Society5.0や予測不可能という言葉が行き交い、現場は学校改革に追われている<sup>1</sup>。目線を教員としての日常生活に戻せば、筆者（永松）が勤務していた大分県津久見市は人口約1万7千人の県内で最も規模の小さな市である。前任校（津久見市立第一中学校）の生徒234人は豊かな自然に恵まれた環境の中で暮らし、素直で素朴、健康で伸び伸びと学校生活を楽しんでいる。そうした牧歌的な生徒たちに、今、どんな教育が必要なのか。

筆者（永松）は2016年度に前任校へ主幹教諭として着任し、2017年度から教頭に就いた。教頭になった当初は、「自分だったらこんな授業を展開するの」と思っていたが、今は「カリキュラム・マネジメント」の推進に関われる立場となり、教育委員会はもちろん県内外の企業や外部講師と現場の授業をつなぐことができていく。今なら教諭時代にはできなかったような美術の授業ができるのではないかという思いがある。

着任の頃と時を同じくして、津久見市教育委員会は未来を担う津久見市の子どもたちの人材育成を目標に「ふるさと教育」<sup>2</sup>を立ち上げた。さらに、「津久見プロジェクト」<sup>3</sup>の一環として、津久見市教育長をチームリーダーに、大分大学、大分県立美術館、現場が連携した、中学生期における「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習の研究が、前任校を研究実践校としてスタートした<sup>4</sup>。

次の時代を意識すればこそ、子どもたちにはリアルな場において、リアルな想像力を育てることが必要であると確信している。それが美術科教育の、他教科には真似のできない魅力だろうと考えている。本稿において、その足跡を報告するとともに、これからの時代に必要不可欠な資質・能力の育成について考察を行う。

## 2. 美術を中核に据えた学びの到達点（目指した生徒たちの姿）

「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習の研究では、地域の自然や文化、歴史、産業などを「色」から捉え、「色」を共通項に各教科が横断・融合し、地域を知り、その魅力を発信する学びを推進してきた。その要となるのは、「アート」を担う美術科であり、「言葉」を担う国語科・英語科であり、「学校（学び舎）」であり、「地域（自然）」である。以下は本研究で目指した生徒の姿について5つの教科等の観点から設定したものである。

美術	地域の色に関心をもち、天然顔料や地域の美術の美しさを主体的に味わう生徒
国語	目的や意図に応じて構成を工夫し、獲得した語彙を活用しながらわかりやすく書き、説明できる生徒
理科	地域の鉱物や大地のなり立ちに興味をもち、科学的な見方・考え方を探究する生徒
英語	他教科で学習したことを基に、英語を活用して故郷の魅力を中心に発信する生徒
総合	地域の資源に着目し、探究心を発揮しながら、故郷の魅力を主体的に発信する生徒

これはあくまで一例にすぎない。本来であれば、ここにすべての教科があることが望ま

教科を越えた共通テーマを「色」に定めた。本研究では、「ふるさと教育」の意味を強めるために、それを「地域の色」と呼んだ。「地域の色」を中心に置くことで、自然、文化、芸術、生活、言語といったあらゆるものを結びつけることができる。教科が分断している現状を改善する上で、「地域の色」というテーマは重要なキーワードになると考える。概念図を見てわかるように、古くから伝わる地域の文化や産業、自然環境がもたらした地域の特産物など、それらのものが社会とつながる学びに広がっていく。そのつながりを担うのが美術科をはじめとした学校教育である。

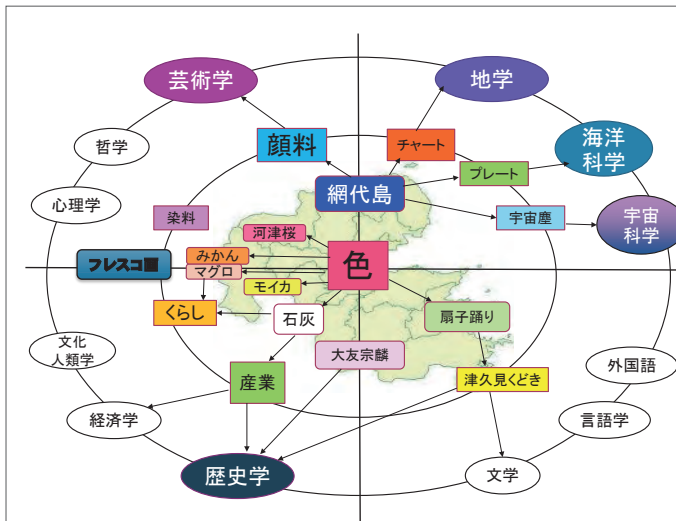


図1 「アートと言葉」の概念図 5

しいが、自ら手を挙げてくれた教科とともに取り組んだ(図1)。いまや義務教育課程において多面的学習の視点から生徒たちの育成を促すことは必須であり、「総合的な学習の時間」は各教科で深めた学びの発信の場や統括

の場となるべきである。そして、そうした学びの連続が、最終的には、地域の教育資源（文化・自然・人）を結びつけ、小学校から計画的に学習活動を展開させる「ふるさと学習」になっていくものと考えている。

### 3. 「地域の色」を中心に置いた教科融合型学習への歩みと学校改革

#### (1) 2016年度研究開始当時の状況

着手した学校改革は学校変革期（2016～2017年度）と学校成熟期（2018～2019年度）に大きく分けることができる。喫緊の課題は「教員の授業改善」であった。2016年当時、教職員の年齢が若く、職員室には活気が満ちあふれていたものの、旧学校教育目標「心豊かで、学習意欲と行動力に満ちた一中生」の実現に向けたベクトルがそろっていないかった。教員の中で教科毎に授業改善に対する危機意識に差があり、「家庭環境などの事情から、学力向上は容易ではない」「ここでは、自分のやりたい（最新の）授業ができない」等の発言もみられたことから、まずは教員自らが授業を変える必要があると感じた。また、生徒たちは人懐っこく快活である反面、校内掲示物への悪戯や授業での落ち着きのなさもみられ、不登校生もいた。

#### (2) 学校変革期（2016～2017年度）

##### ①（改革1）学校教育目標の刷新

2016年度赴任当時、主幹教諭であった永松は、校長・教頭の下で学校教育目標を考

え、教職員へ伝えることから始めた。設定した新たな学校教育目標は「ふるさとを愛し、主体的・協働的に学び、行動する一中生」であった。生徒たちが学校で学んだことを他に活かすための3つの資質・能力（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」）を念頭に授業改善を推進し、学校で学んだことと社会（日常生活）とのつながりを実感できる授業、地域の人々や環境とふれあいながら成長していく授業を想定した。

##### ②（改革2）自己改善できる教師の育成

新学校教育目標の下、筆者（永松）が各教科の授業を視察したところ、授業の「めあて・課題」「ふりかえり・まとめ」等の板書がなく、単元や1時間の授業の中で、生徒にどのような力をつけるのかがわかりにくいものが多かった。また、講義形式の授業が多かったこともあり、子どもたちが主体的・協働的に学ぶ姿もあまり見られなかった。

こうした状況を改善するために、教師同士による授業分析と協働的な学び合い学習の導入を推進した。具体的には、毎月数回の教科部会の他、職員会議・研修にて、学期毎の授業内容の振り返りを行い、「学習の定着状況」と「主体的・協働的」な授業のあり方を検討し、教職員の問題意識を刺激した。自身の美術科の授業も公開し、指導法の改善に取り組んだ。

##### ③（改革3）教科間の「つながり」を強めるための意識改革

2017年度より市の教育長をチームリー

ダーとした「津久見プロジェクト」の一環として「アートと言葉」の研究が開始した<sup>6</sup>。この事業の目的等は本稿の「はじめに」に示した通りだが、開始当時、教職員に「教科横断・融合的な学習」や「地域資源や人材とのつながり」への意識は皆無であったと言つてよい。例えば美術科の鑑賞授業にて国語科とのつながりを求めても「絵画鑑賞を言葉で表現するのは困難」という教員からの訴えがあった。

美術科では、鑑賞の記述の分析は「国語科の分野」と敬遠された。そこで取り組みの指標に総合的な学習の時間で「色」をテーマとした教科融合型学習（美術・国語・理科）の実施を掲げ、美術科を軸に「各教科のつながり」を前提とした授業改善を全教員に促した。

##### ④（改革4）学校の学びを社会に開くための各教科の結びつけ

津久見市の基幹産業は石灰工業であり、全国有数の産出量（推定埋蔵量は40数億トン）を誇る。そして、戦国時代から伝わる伝統芸能「扇子踊り」、市内四浦半島を彩る5千本の「河津桜」等がある。それらを地域の産業界・文化保存団体と連携しながら市内小・中の教育課程に取り入れたものが「ふるさと教育」である。前任校の「色」をテーマとした教科融合型学習（図1参照）もこの取り組みと連動させることで、教育委員会からの十分な支援を受けることができた。

#### (3) 学校成熟期（2018～2019年度）

2018年度は全教職員・全校生徒・地域・



(解説) 右の振り返りからは、授業を受けたことによって想像や疑問、楽しさ、探究の姿、郷土を愛する心が育成されていることが見て取れる。

(生徒の振り返り)

大昔の人は石や植物から色を取っていたと知って驚きました。それに石から色がつくれることにびっくりしました。私は石灰石を持ってきて、(砕いて色にすると)予想通り灰色でした。でも、私の想像していた灰色より、少し白っぽかったです。そこが疑問になりました。石を砕いたり、つぶしたり、ふるったり、濾したりすることは楽しかったです。まるで、幼児に戻った気分でした。

私が疑問に感じていた「灰色が少し白っぽく見える」のは、石を砕くと光の反射を多く受け、人間にはそれを白っぽく感じるということが、サイエンスレクチャーでわかりました。美術の授業なのに理科の授業を受けているようで、美術と理科を一緒に授業をするということは、すごく良くてわかりやすいなと思いました。それに、津久見で石灰石が採れることは知っていましたが全国有数とは知りませんでした。津久見市を誇りに思います。

写真1 網代島の様子と授業後の生徒の振り返り

保護者が学校教育目標に対し、ベクトルをそろえていけるよう、校長は目指す学校像をスローガン「日本一熱く、絆強き学校」と掲げた。教職員から「アートと言葉」の研究への協力と理解が得られるようになってきたこともあり、より一層推進していくことになった<sup>7</sup>。

#### 4. 美術を中核に据えた教科融合型学習の実践の具体

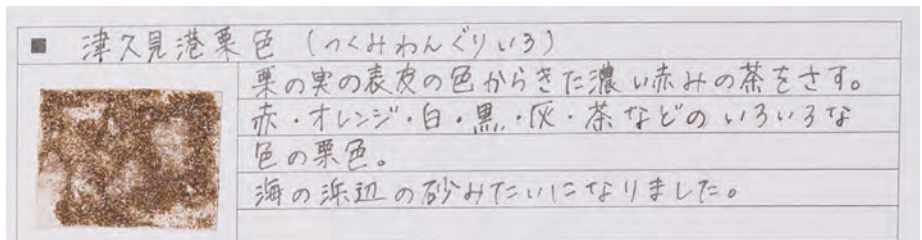
(1) 岩石を砕いて絵具をつくる授業

「サ・ピグメント」

(2016～2019年度)

(美術×理科×総合)

美術科で地域の岩石を細かく砕いて顔料を



■ 砂貝白茶 (さかいしらちゃ)

白茶色に近く、砂みたいサラサラしていて、貝を砕いて絵の具をつくったから「砂貝」を加えました。津久見の網代島で取った貝でオリジナルの色をつくりました。

写真2 生徒によって名付けられた色名とその意図 (ワークシートと作品例)

つくり、膠を混ぜて色を制作し、できあがった色を使って絵を描いた。その後、理科教諭が津久見市に在る岩石の形成過程や色と成分との関係性、更に地域の無人島「網代島(写真1)」で発見された2億4千万年前の隕石のかけら(宇宙塵)について学ぶ授業「サイエンス・レクチャー」を行い、生徒たちの地域や岩石、色への理解や興味関心を高めた。授業内容は次の通りである。

津久見市日代に位置する網代島には、海底5千メートル以上深い海の底で形成されたチャート層が確認できる。2億4千万年かけて、南太平洋からプレート運動によって津久見まで移動してきたものであり、当時の隕石のかけら(宇宙塵)がチャート層に含まれている。最も古い宇宙塵とされるという研究もある。

学習の経過としては、1年生では自宅近辺の岩石を採取し、2年生では網代島に行つてスケッチを行い、岩石を採取し、美術科で岩石を砕いて顔料をつくる授業を実施した<sup>8</sup>。生徒の振り返り(写真1)を見ると、理科(地学)にとどまらず、美術の「色」と融合的に記述していることがわかる。本授業は、2016年に大分県立美術館職員を外部講師として前任教に招いて実施した内容を教育課程に組み込み、現在まで1・2年生で継続している。

(2) 絵の具に色名を付ける授業

(2017年度、2019年度)(美術×国語)

2年生では、網代島から持ち帰った岩石の色合いの違いについて班で話し合いながら、



(解説) 鑑賞文からは、構図・対象・色彩・音・香り・季節感等の観点から感じたことをふるさととの自然に対する思いにつなげていることがわかる。

(生徒の感想より)

この絵からはたくさんの音が聞こえてくる。津久見のセメント工場から聞こえる機械の音、山の木々が奏でるざわざわという音、そして波の音。工場の前に広がる海はまるで写真のようだ。山は二つの場面に分かれている。一つは緑の木々の広がる部分。二つ目は削られて岩がむき出しになっている部分だ。岩の部分は色の明暗を使っているところが印象に残る。主に灰色が使われているが、一言に灰色と言ってもこの岩の部分にはたくさんの種類の灰色が使われているのだ。濃い灰色、うすい灰色、少し赤みがある灰色、黄色がかった灰色、たくさんの灰色を使うことで岩に影を付け、光が当たるといふ表現をしているのだろう。この絵は故郷の懐かしさにじむ、心が和む音あふれる自然の豊かさが表現された絵なのだ。

写真3 地元作家の作品『朝』を鑑賞する生徒と生徒の鑑賞文

絵画を読み解く単元(布施英利『君は「最後の晚餐」を知っているか』中2、光村図書出版)を活用し、生徒に対し、対象となる絵画の筆者の考えを読み取ったり、筆者の考えについて自分はどう思うのかを話し合ったりさせた。これらの授業は、4・(4)美術科の鑑賞授業にもつながった。

### (3) 鑑賞の説明力を高める授業

(2017～2019年度) (国語×美術)

1年生の国語科の授業には、絵画作品などを対象として、相手に説明する力を育成する単元(「根拠を明確にして魅力を伝えよう」中1、光村図書出版)がある。そこで、国語科と美術科が協力し、郷土作家の油絵画作品『朝』(写真3)を鑑賞し、様々な観点から感じたことを鑑賞文にまとめる授業を行った<sup>11</sup>。「色」「音」「香り」等「津久見の色・自分の色」を意識した鑑賞文が数多く生まれた。2年生では、国語の教科書に掲載されているダ・ヴィンチ作『最後の晚餐』の



(2017年移動美術館後の生徒アンケート)

私の1番印象に残った作品は「土塊」です。理由は、この作品には2つの見方があるからです。1つは風景で、もう1つは人の心情を絵に表したものです。土塊は「人の孤独」を表していて、土塊の近くで咲いている花は、土塊によりそう「優しさ」のように見えました。中学生ガイドの説明もわかりやすく、よかったです。

写真4 一日学芸員を務める生徒とアンケート

教科書掲載の「日本の伝統色」や「伝統色ワークブック」<sup>9</sup>を活用し、色ごとに種類を分類した。その後、4・(1)「ザ・ピグメント」の授業で岩石を顔料にし、一人につき2色、ふるさと津久見にちなんだ色名を付け、命名の意図を考えさせた(写真2) <sup>10</sup>。

(4) 本物の作品鑑賞を通して深い対話を生む授業(2016年度、2017年度、2019年度) (美術×国語×総合)

2016年11月下旬、第一中学校の体育館において、全校生徒・地域の人々を対象とした、大分県立美術館の所属作品展「スクールミュージアム」が開催された。県内外の作家作品、合計35点が展示された。生徒たちは、「ザ・ピグメント」の授業で学んだ「色」や「岩石」の知識を踏まえ、実物の作品の前に立ち、「何を感じ、表現できるのか?」を目標に、県立美術館鑑賞サポーターから指導を受け、鑑賞活動を行った。

1年後の2017年にも、県立美術館所蔵品展が開催された<sup>12</sup>。ここでは2年生の生徒たちに、作品について事前に学んだことをもとに、一日学芸員として来場者に作品の説明を行うことを求めた(写真4)。生徒は4・(3)の授業を受け、展示作品から自分たちの紹介す

自己評価 **美術と国語のC～Sの評価**で、自分が該当すると思ったものに○をつけよう。

美術1	C	B	A	S
作品からイメージを広げ、想像力を働かせながら鑑賞する。 ④鑑賞の能力	作品からイメージを広げることができず、想像を働かせて鑑賞することができなかった。	作品からイメージを広げて、物語を考えるなど、自分なりの想像を働かせながら鑑賞した。	作品からイメージを広げて、物語を考えたり、サブタイトルを考えたりなど、自分なりの想像を働かせながら鑑賞した。	作品からイメージを広げて、物語を考えたり、サブタイトルを考えたりなど、家に飾るとしたらどこに飾るかなど、様々な想像を働かせながら鑑賞した。

国語1	C	B	A	S
美術鑑賞にふさわしい語句などを活用して、自分の考えを述べる ⑤言語についての知識・理解	構図・配置、対象・素材、色彩などの語句を使って、自分の考えを述べることができなかった。	構図・配置、対象・素材、色彩などの語句を使って、自分の考えを述べることができた。	構図・配置、対象・素材、色彩などの語句の他、遠近、動き、明暗などの語句も使って、自分の考えを述べることができた。	構図・配置、対象・素材、色彩、遠近、動き、明暗などの他、音や匂い、季節感などの語句も使って、自分の考えを述べることができた。

美術科は鑑賞の能力、国語科は言語についての知識・理解をS、A、B、Cの4段階に分け、生徒に自己評価させた。国語科と美術科の両教科において、S評価が48%、A評価が32%であった。主体的な行為である「作品を見ること」と「見たことを言葉化すること」の狭間で生まれた質の高い学びが生徒に達成感を味わわせ、作品への深い理解へとつなげることができたためであると考察する。

図2 自己評価ルーブリック

る作品を選択し、作品の紹介文を書き、対話型鑑賞の練習を行った。評価は、美術と国語の2観点から作成した自己評価ルーブリック(図2)を用いて行った。

授業後に全校生徒を対象に振り返りを行ったところ「今日の授業は楽しかったですか？」に対し、肯定的な意見は97%、「中学生学芸員と一緒に作品を見ることについてどう思いましたか？」に対し、肯定的に答えた生徒は93%だった。19ページ写真4の感想を見ると、鑑賞が多角的に行われていたことがわかる。

**(5) 地域の資源を用いた教科融合型学習の拡張 (2018年度) (美術×理科×総合)**

津久見市教育委員会では、一般市民の生涯学習活動として津久見市にある大分県石灰工業会13の協力を得て、「フレスコ画」教室を夏休みに開催している。この「フレスコ画」教室も地元の人材や資源を活用した広域の融合型学習の一つであると考え、2018年度からは3年生で授業実践を試みた。授業の導入では、津久見市教育委員会生涯学習課の職員の協力を得て、生徒に対し、具体的な作品

や画像をもとに「フレスコ画」の基礎知識や津久見市における歴史を学習させた。生徒は、これらの学習の後、「ふるさと津久見」を表現する言葉と下絵を考えた。

授業では、大分県石灰工業会と市教委生涯学習課の協力を得て、1時間目に前日から水に浸けていた赤レンガに石灰モルタルをのせ、下地づくりを行った。そして、それが乾き始めた午後、顔料を水で溶き、石灰モルタルの上に下絵に沿って描いていった。下描きには、生徒が「ザ・ビッグメント」の授業で岩石から制作した顔料も使った。「フレスコ画」は、乾燥が始まると、表面を石灰石と同じ成分が顔料を覆い、空気中の二酸化炭素と反応して透明な炭酸カルシウムの結晶(カルサイト)になり、鮮やかな色彩が残る。生徒たちはこれらの化学反応のしくみについて、理科の授業で学習した。完成作品は校内や市内図書館、大分県立美術館に展示し、地域の方々へ学びを発信した。(写真5)

**(6) 教科融合型の成果物作成 (2017～2019年度) (美術×国語×英語)**

2年生の学習のまとめと周囲への発信方法として、2017年度の3学期に「アートと言葉新聞」(写真6)の作成に取り組んだ14。総合的な学習の時間を活用し、地元紙の記者を外部講師に、「新聞のつくり方」を学び、自己評価ルーブリックで振り返りをしながら、「より良いデザイン・構成による紙面づくり」「読み手に伝わる見出しの付け方」「要

約した文章づくり」を学習し、制作した15。  
 2018年度の3年生の卒業前には、生徒が中学校生活やふるさとへの思いをペン画と英作文で表現した、美術と英語の教科融合型

学習の成果物として、「卒業ペン画集英語版」を完成させた(22ページ写真7)。美術科、国語科、英語科が融合した成果物の作成は2017年度から現在まで継続して行っている。

して、文化祭展示を実施した。2018年度はそれを市内図書館・大分県立美術館に「アートと言葉の時間展」として展示し、県内・市内の地域の方々に公開した。

(7) 学びの成果の視覚化への取り組み

(2017～2019年度)

(美術×国語×理科×英語×総合)

2017年度には、学びの成果物として『津久見色辞典』を制作した。『津久見色辞典』は名前の通り、生徒が自分の制作した顔料に色名を付け、「言葉」を集めた「辞典」である16。総合的な学習の時間の発表の「場」と

2019年度は、一年間の取り組み「サイエンスレクチャー(理科)」「網代島巡見(総合的な学習の時間)」「ザ・ピグメント(美術科)」「津久見をPRするキャッチコピーづくり(国語科)」「ふるさと津久見を表現する英文(英語科)」に再度改善を加えて実施し、その成果物を『津久見美・事典』(22ページ・写真8)としてまとめた。ページをめくると、まるで百科事典のように津久見の魅力に関す



津久見のみかんはとてもおいしいので、この先もたくさんの人にみかんを食べ続けて欲しいと思い、この絵を描きました。背景の色は津久見のきれいな海をイメージして青にしました。「みかん」と「青」でふるさと津久見が表現できたと思うので、描いてよかったと感じます。

写真5 地元企業の方に下地づくりを学ぶ生徒、できあがった「フレスコ画」と作品解説

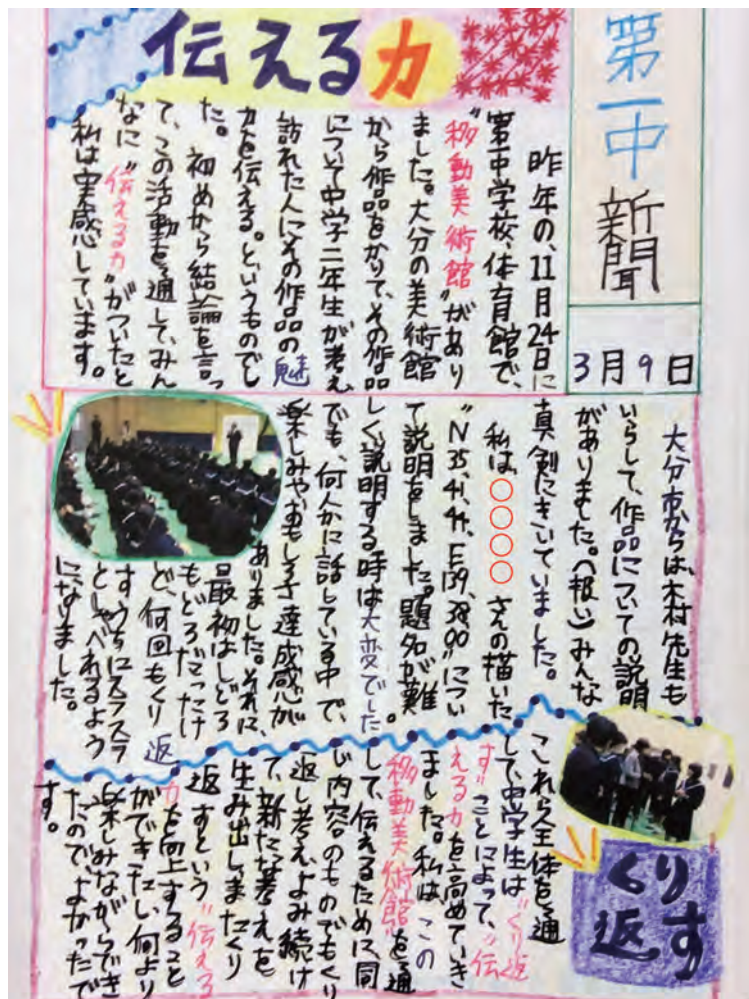


写真6 アートと言葉新聞(2018年度)

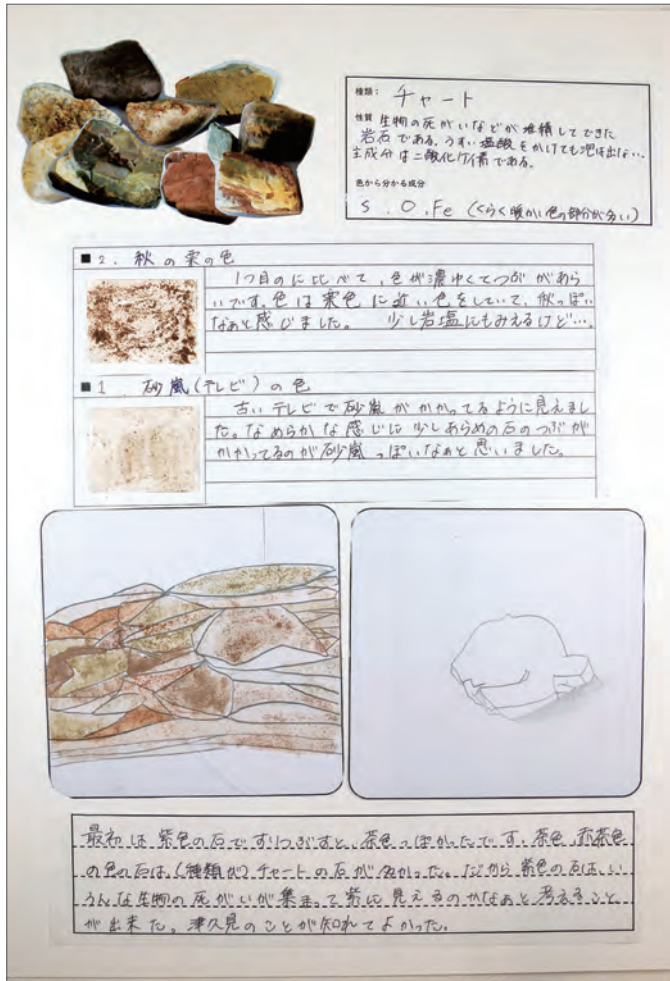


写真8 「津久見“美”事典」(2019年度)



写真7 卒業ペン画集英語版の表紙(2018年度)

「アートと言葉」の取り組みに加え、新学校教育目標の下、授業改善の取り組みを組織的に実践した結果、2019年度の生徒アンケートにおいて、「学校が楽しい」と答えた生徒は96%（2016年当時は73%）、「授業がわかりやすい」では93%（2016年当時は76%）、ペアやグループの「学び合い」に対しては100%（2017年度は87%）という結果が出た。4年前（2015年度）に確認されていた不登校生4名が2018年度には0人になり、2019年度は、全校欠席0人の日が年間で20日に達した。

また、県内外や地域の方、地域の企業に4年間も授業に関わっていただいた。「アートと言葉」の授業では、生徒たちは教室の外に出て活動する機会も多い。「津久見色辞典（2018年度）」や「津久見“美”事典（2019年度）」等の成果物を見ると、教科が融合し、地域の「自然」や学校等での「学び」が表現されている。それらは学校公開授業の感想（写真9）をはじめ、コミュニティースクールなどにおいて、数多くの「感動のこ

## 5. 実践を振り返っての成果と課題

「アートと言葉」の取り組みに加え、新学校教育目標の下、授業改善の取り組みを組織的に実践した結果、2019年度の生徒アンケートにおいて、「学校が楽しい」と答えた生徒は96%（2016年当時は73%）、「授業がわかりやすい」では93%（2016年当時は76%）、ペアやグループの「学び合い」に対しては100%（2017年度は87%）という結果が出た。4年前（2015年度）に確認されていた不登校生4名が2018年度には0人になり、2019年度は、全校欠席0人の日が年間で20日に達した。

また、県内外や地域の方、地域の企業に4年間も授業に関わっていただいた。「アートと言葉」の授業では、生徒たちは教室の外に出て活動する機会も多い。「津久見色辞典（2018年度）」や「津久見“美”事典（2019年度）」等の成果物を見ると、教科が融合し、地域の「自然」や学校等での「学び」が表現されている。それらは学校公開授業の感想（写真9）をはじめ、コミュニティースクールなどにおいて、数多くの「感動のこ

るたくさんの方が目に届く。各教科が融合した成果を感じ取ることができる。これらの成果も、津久見市図書館、津久見市立第一中学校学校図書館に寄贈した。今後も『津久見“美”事典』を地域の方々が手に取って見ていただくことで、生徒たちの学びの成果や、ふるさとの良さを感じてほしい。





写真9 国語で絵画を説明する生徒と地域の方の言葉

こんな授業を受けたいなと思いました。授業が身近に役立つものだと気付く。授業の終わりにプレゼン力・自分の考えを表現する。観る・聴く・発言する・交流する要素いっぱいの授業でした。

とば」として前任校に還ってきている。これらの成果を管理職や教職員が異動しても引き継ぎ、実践を重ね、授業改善を基に、未来の大人づくり（人材育成）につなげていくことが課題である。

## 6. 教科融合についての考察と今後の展望

この4年間、生徒たちは、津久見の自然の「色」に触れ、自分なりの新たな色名を考え出したり、津久見市内の無人島（網代島）の岩石の成分を分析したり、地域の魅力をアピールする文章を日本語や英語で考えることに取り組んだ。こうした学びは、美術科の感じる心と創造力、国語科・英語科の思いや考えを言語化する力を融合的に結びつける。地域の自然はその豊かな土壌としての役割を果たし、学校がその芽生えの場となっていた。

松尾は、学習指導要領の改訂に触れ、「今回の改訂は、学校教育における教授（teaching）から学習（learning）へのパラダイム転換を意味するもので、これまでの教育のあり方を抜本的に変革する教育改革として捉えることもできる」<sup>17</sup>のように述べている。「教科融合」という概念は教科の枠組みを取り払い、生徒たちに多様な学びをもたらす一つのきっかけを与える。本稿において、それは十分に示すことができた。

教科融合型の学習におけるメリットは様々な場面で「調和」を生み出せる点にある。それは対象に身を浸すとも言っても良い。本稿では、現物たる美的対象（美術作品）を国語科や英語科、理科の学びの場に持ち込んだ。その意図は、本物との調和とレプリカとの調和とでは、体験の質として、根本的・本質的に異なるという確信があるからである。また、調和性のある体験を「対話」と言い換えること

ができるならば、本研究では、美との対話のみならず、自らが生まれ育った故郷との対話、自分自身の学習履歴との対話を為しえたことになる。これらは閉じられた教室空間、与えられた教科書教材だけでは生み出しにくい多様な対話である。美術を軸とした教科融合型の授業実践は、生徒の学びの変容とともに、各教科の互見授業と内容検討の積み重ねを通して教師自身の意識に変化をもたらした<sup>18</sup>。本研究に携わった教師の授業改善が他教科の教員の意識にも良い影響を与え、教科・学年を越えて手を取り合う姿が度々見られるようになった。今では学校全体の授業改革につながっている。

本研究における教科融合型の学びの成果は前述の通りであるが、教育課程に組み込み、単元計画を仕上げ、連携を継続させる一番のポイントは、核になる教師をつくることである。本研究においては、美術教師がその役割を担ったが、美術科本来の教科のねらいも達成しなければならなかったため、各実践の評価方法の開発の難しさを味わった。本研究も足掛け4年間かけて取り組んできたが、「融合」によるメリットを生かしながら、各教科で共有できる評価の観点を開発していかねればならないと考えている。

## 7. おわりに

大分大学、津久見市教育委員会、大分県立美術館と連携し、美術科を軸とした教科融合型学習の研究を推進してきた。初年度は着地のイメージも抱けぬまま走り出し、教職員や地域の方々を戸惑わせたに違いない。そうした中でも研究を進められたのは、津久見市の美しい自然を目の当たりにし、その価値を子どもたちの学びの成果から感じ取ることができたからだった。

彼らの成長した姿が、これらの取り組みを4年間続ける原動力となった。

謝辞 これまでの実践に対し、ご尽力いただいた、津久見市、津久見市教育委員会、大分県立美術館、津久見市立第一中学校、津久見市の皆さんに心から感謝申し上げます。



### [注]

- 1 平成31年4月17日には、文部科学省より「新しい時代の初等中等教育の在り方について（諮問）」が出され、よりよいその指導の充実が検討されはじめられる。出典：文部科学省 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingij/chukyoo/chukyoo/toushin/1415877.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingij/chukyoo/chukyoo/toushin/1415877.htm) (2020年7月参照)
  - 2 津久見市教育委員会ホームページ <http://www.city.tsukumi.oita.jp/sosnki/24/7.html> (2020年7月参照)
  - 3 平山正雄「中学校の取り組み」地域の色・自分の色実行委員会+秋田喜代美編著『色から始まる探究学習』明石書店、2016、pp.102~113
  - 4 公益財団法人博報児童教育振興会（現・公益財団法人博報堂教育財団）第12回児童教育実践についての研究助成「中学1期における「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習」（2017年度、長期継続助成2018年8月~2020年3月）（研究代表：藤井康子）
  - 5 前掲の共同研究者（2017年4月~2018年3月、2018年8月~2019年3月迄）の木村典之氏が作成した「津久見プロジェクト」の概念図を基に、筆者（永松）が作成した。
  - 6 藤井康子・木村典之・永松芳恵「中学校美術科と国語科の教科融合型学習の研究①—地域の鉱物から顔料を作り、色名を考える事例から—」『日本美術教育研究論集』No.51、公益社団法人日本美術教育連合、2018、pp.281~282
  - 7 津久見市立第一中学校が「第12回児童教育実践についての研究助成」（前掲4）に関わる研究実践校になったことも大きい。これ以降3年間、連携する教科を増やしながら、新しい授業の開発等に取り組み続けた。該当学年の2016年度入学生は、永松が2018年度までの3年間、授業を担当した。
  - 8 藤井康子・木村典之・永松芳恵「中学校美術科と国語科の教科融合型学習の研究②—地域の鉱物から顔料を作り、色名を考える事例から—」『日本美術教育研究論集』No.51、公益社団法人日本美術教育連合、2018、pp.284~285
  - 9 一般財団法人日本色彩研究所編『ワークブック日本の伝統色名』、日本色研事業、2017
  - 10 藤井康子・木村典之・永松芳恵「中学校美術科と国語科の教科融合型学習の研究①—地域の鉱物から顔料を作り、色名を考える事例から—」『日本美術教育研究論集』No.51、公益社団法人日本美術教育連合、2018、p.286
  - 11 藤井康子・花坂歩・永松芳恵「中学校美術科と国語科等の教科融合型学習の研究③—故郷の色をテーマとした学習の成果と課題—」『日本美術教育研究論集』No.53、公益社団法人日本美術教育連合、2020、p.142
  - 12 その後、大分県立美術館所蔵品展は「III美術館」として、県立美術館の協力を得て継続している。2019年度は所蔵品2点を対象に、前掲4の共同研究者（佐藤収氏）と幹事委員から作品の見方や授業の指導を頂いた。古手川産業株式会社をはじめ、11社から成る大分県石炭工業会。
  - 13 生徒たちはこれまで職場体験後に「職場体験はがき新聞」や、地域のお年寄りに「不版画の年賀状」などの取り組みを経験していた。今回、それをさらに深く専門的に学ぶことを試みた。なお、2018年度の3年生では、国語の物語文の単元（井上ひさし「握手」）、中3、光村図書出版）で登場人物に捧げる「追悼新聞」を制作した。
  - 14 藤井康子・木村典之・永松芳恵「中学校美術科と国語科の教科融合型学習の研究②—津久見色辞典とアートと言葉新聞の制作—」『日本美術教育研究論集』No.52、公益社団法人日本美術教育連合、2019、pp.192~195
  - 15 前掲、pp.190~192
  - 16 松尾知明「21世紀に求められる「コンテンジャー」と国内外的教育課程改革」、国立教育政策研究紀要、No.146、2017、pp.9~22、p.18
  - 17 藤井康子・花坂歩・永松芳恵「中学校美術科と国語科等の教科融合型学習の研究③—故郷の色をテーマとした学習の成果と課題—」『日本美術教育研究論集』No.53、公益社団法人日本美術教育連合、2020、pp.144~146
- 付記：本稿は永松、藤井、花坂の三者で構想し、永松が主たる執筆を担い、藤井が先行研究を踏まえた実践と考察の検討、花坂が言語の教育の観点からの実践と考察の検討及び論述の整合性についての検討を主に担い、そのすべての内容が三者によって協議し、永松が完成させた。